# 安心して学校生活を送るための取組について

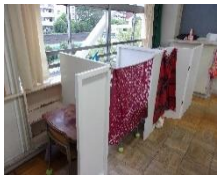
## 不登校児童の状況

対象児童は、校内別室を利用することで、登校が安定してきた。週１日の特別支援教室の指導を受けている。小学校６年生になった今年度は、運動会や学習発表会などの行事にも参加することができ、自信を付けてきた。また、所属学級の教室で過ごす時間も増えてきており、中学進学への意欲を高め、前向きに学校生活を送っている。

## 具体的な取組

○校内別室の環境整備

個人で集中して活動できる場所をパーティションで仕切り、一人一人に机と椅子を配置した。また、複数の児童が集まって活動できる絨毯の部屋も別に用意して、様々なニーズに応じた環境を整えている。



○一日のスケジュールの工夫

別室を利用する児童は、登校後、スケジュールを立てるようにして、見通しをもって過ごせるようにしている。自己の課題に取り組む「集中タイム」や友達と関わる「リラックスタイム」等、個々の主体性を尊重しながら、安心して過ごせるように支援している。

○支援担当者と担任との連携

校内別室の支援担当者は、利用する児童の活動の様子を記録し、それをもとに担任と情報共有し、連携を図っている。教室や専科（音楽や図工など）の授業、学校行事等の参加については、当該児童の意思を大切にし、当該児童が自己決定できるようにして、教室復帰を目指してスモールステップで進めている。

○心理的支援の充実

ＳＣによる校内別室や教室での授業観察、個人面談を学期１回程度、実施している。

複数人配置している校内別室の担当者による個別相談は日常的に実施しており、心のケアに努めている。

## 成果

・校内別室による支援の取組が、不登校の解消や所属学級で過ごす時間の増加につながっている。
・当該児童の思いや考えを尊重し、登校や学びに向かう意欲の高まりに応じて、ニーズに合った支援を進めることができた。

## 課題

・環境の異なる中学校への支援状況の引継ぎを確実に行うこと
・支援の好事例を他の児童への支援に活用すること

# 子どもたちが安心して過ごせる校内別室

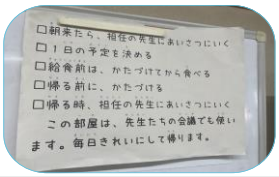
## 不登校児童の状況

対象児童は、場面緘黙で人とコミュニケーションを取ることが難しく、教室に入ることに抵抗があり登校できなかった児童である。校内別室という少人数の環境ができたことで安心して登校できるようになった。また、小集団の中では友達や教員ともコミュニケーションを図れるようになり、笑顔で過ごせることができるようになっている。

## 具体的な取組

○登下校時の挨拶の定着

登下校時は、支援員と共に教室に挨拶に行くことを決まりとしている。担任が課題を渡したり、クラスメイトが声をかけてくれたりする機会にもなっている。教室に入ることに抵抗がなくなった児童もいた。




○週案の掲示

ホワイトボードに利用者のクラスの時間割を掲示することで、いつでもクラスで行われている教科を確認することができるようにしている。支援員や立ち寄った教員の声をかけるツールにもなっている。

○記録ファイル

利用児童一人一人の記録ファイルがあり、活動内容を簡単に書く項目を設けている。担任が部屋に立ち寄ることができなくても、児童が何をして過ごしていたのかを把握できるようにしている。

○校内体制の整備

月１度、不登校児童対応を目的とした校内委員会を実施し、校内別室の利用状況や課題等を話す場を設けている。支援員の困り感や不登校児童の情報共有の場を設けることで、校内での支援体制を明確にし、組織で対応できるようにしている。

## 成果

当該児童にとって学校に安心して通える場となった。集団が苦手で友達との関わりがもてなかったが、校内別室の小集団の中でコミュニケーションが図れるようになり、貴重な人間関係形成の場となった。

## 課題

校内別室の居心地がよく、ゲームなどをして過ごせることに加えて、学習への機会を確保すること。

# 令和６年度　校内別室の現状について

## 不登校生徒の状況

　対象生徒は、周囲とのコミュニケーションが図れない、人が多く騒がしい場所が苦手、学習や学校生活のスピードについていけないなどの理由から別室登校している。

## 具体的な取組

○学校全体でサポートしていく工夫①

　各学年に登校支援担当の教員を１人配置している。

　毎月２回登校支援対策会議を開催し、管理職、養護教諭、生活指導主任、登校支援担当者(各学年１人)、ＳＣ、ＳＳＷで不登校生徒の情報交換や対応策の検討、校内別室利用者の状況の確認などを行っている。

○学校全体でサポートしていく工夫②

　当該生徒・保護者と面談を行い、個人の目標や配慮事項を明確にしている。また、学校全体で共有できるよう、個人票を作成し、支援員とも共有している。

　別室利用している生徒を学校全体で把握できるように、職員室にホワイトボードを設置し、利用者の動きを細かく記入している。

○利用しやすい場所にする工夫①

　別室利用する生徒が周囲を気にせずに個別学習に取り組めるよう、パーティションを設置し、学習環境を整えている。

○利用しやすい場所にする工夫②

　当該生徒が自分の体調に合わせて登校できるように、毎日開設を行い、支援員がいない時間帯の利用希望の場合には教員が適宜対応している。

　一人一人の状態に合わせて校内別室と学級との併用を認め、学級復帰につなげている。

## 成果

　学校全体での組織的な対応により、利用生徒の安心感につながっている。また、一人一人の利用目的を学期ごとに確認・更新しているため、各自の課題意識に基づく学習課題等を、静かな空間で取り組むことができ、利用生徒にとって心地よい居場所となっている。

## 課題

　利用生徒が、目標をもって次にステップアップしていくことができるように、個に応じた支援していくことが課題である。

# 不登校生徒にとって学校が安心・安全な場と実感できるために

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の内容が定着しておらず、中学校に入学してから授業についていくことが難しくなった。また、異なる視点をもつ生徒との関わりの中で、学校に行くことが不安になってしまった。

## 具体的な取組

○校内別室の活用

教室復帰のためのステップとして、校内別室を利用した。その場で様々な教員との関わりが増え、学校が安心できる場となった。

○学級との関わりの維持

学級の生徒に校内別室まで給食を届けてもらうようにしている。受け渡しの際に些細な話をすることができ、コミュニケーションが生まれている。

○ＳＣによるカウンセリング

週１時間、当該生徒の不安や悩みを共有し、学校内に安心して話せる場が増えることを目的に実施している。

○教室復帰後の支援

当該生徒は、教室復帰を果たしているが、担任や支援員から「教室に疲れたら休んでもいいんだよ。」と校内別室にも通えるよう、当該生徒に配慮している。

## 成果

当該生徒は、別室登校で多くの教員や支援員との信頼関係ができ、自信がつき、教室に復帰することもできた。別室と教室との併用も可能であると伝え、自分のペースで別室と教室を利用した。現在は毎日、教室に通常登校している。週５時間ほど別室も利用しているが、徐々に別室利用も減ってきている。

## 課題

遅滞している学習内容の支援として、校内別室で小学生の学習内容の復習を促していく。

# 自学自習できる力の向上について

## 不登校生徒の状況

　対象生徒は、転校による家庭環境の変化に伴い生活リズムが崩れていった。ゲームにのめり込み生活リズムが更に崩れて欠席日数が増加した。

## 具体的な取組

○利用生徒の目標の明確化及びつまずき箇所の確認

　日、週、月ごとの学習に関する目標を決定した。各教科における自身の進度を確認した。既習事項の復習を中心に分からない箇所を明確にした。

○利用生徒が苦手としている単元の克服

　基本問題を中心に解く力を伸ばした。同じ教科の学習だけにならないよう時間ごとに様々な教科を学習した。理解が不十分の内容はその日のうちに解決できるよう支援した。

○教室復帰の工夫

　教室に入れそうな授業や体調の良い時は教室に入ることをチャレンジする機会をつくった。

　体調面で困難が生じた時、次時は校内別室に戻る等、臨機応変に対応した。

○所属感をつくる工夫

　全校で活動する始業式、終業式、講演会等、支援員と一緒に後方で参加し、学年の生徒と同じ予定で行動できるよう支援した。

## 成果

　教室に戻りたいという気持ちを高め、調子が良いときに授業に参加する場面を多くつくることが自信につながった。

## 課題

　長期休業明けや定期考査後は欠席が続くこともあったので毎日の登校を支援する。

# 校内別室の活用方法について

## 不登校児童の状況

対象児童は、校内別室に通い始めた頃は、首を振って支援員に意思を伝えていたが、１学期は言葉で意思を伝えることが増えるなど、校内別室に登校することで自信をつけた。昨年度から校内別室を心の居場所として、教室復帰を促したことで、今年度２学期から教室復帰できるようになった。

## 具体的な取組

○運営上の工夫

・「家庭と子供の支援員」を校内別室担当としたため、家庭から遅れると連絡があった日は、迎えに行っている。
・教室参加に不安を感じた際は、支援員が教室授業に付き添い、不安を解消している。
・校内別室日誌や対話を通して、支援員、担任、管理職で日々情報共有している。

タブレット端末の活用

・利用する児童は、支援員とタイピングやＡＩドリルに取り組んでいる。
・教科によっては教室とオンラインでつなぎ、授業に参加している。

○運営上の工夫（別室の環境①）

・毎日 8:30-15:30 まで校内別室に不登校担当教員が最低一人、日によっては二人待機し、いつでも支援できる環境を設定している。
・利用する児童の実態・内容に合わせ、個別学習・協働学習を行っている。
・毎日 15 分間、一人一人が自分なりの課題を立て取り組んでいる。

○情報共有の工夫（別室の環境）

・個別のロッカーを設け、そこに学級からの課題を入れる。
・利用する児童一人一人が一日の予定を立て、後で担任が活動の確認をできるようにしている。
・時間割を掲示し、教室に行けそうな教科は教室で受ける。場合によっては支援員が連れて行く。
・対象クラスの週案をストックし、支援員が確認できるようにしている。

## 成果

校内別室に通い始めた頃は表情が暗かった当該児童が、通い続けることで自信をつけ、徐々にクラス復帰できるようになるなど、成果が現れている。また、校内別室に通う児童は、異学年同士で関わる機会も増え、集団性も身に付いてきている。

## 課題

校内別室の居心地が良すぎるため、教室復帰につなげることが必要である。

# 校内別室を活用した居場所づくり

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校１年生であり、小学生の頃に人間関係がうまくいかなかった生徒と同じ学級になってしまったことから、５月頃から教室に入りづらくなってしまった。当該生徒の保護者は仕事で日中不在にしており、欠席すると家で独りになってしまうため、校内別室の利用を提案した。校内別室では、教室から給食を友人に運んでもらい、そこでの友人との関わりをきっかけに、授業に少しずつ参加するようになった。次第に学級に戻る時間が増え、１か月程度で学級に復帰することができた。

## 具体的な取組

○校内別室の活用

欠席が継続しそうな生徒に対し、学級以外の居場所である校内別室を活用することで、不登校の未然防止を図る。

校内別室は、学級同様に学習環境が整っていること、生徒に応じた時間に登校して生活リズムを整えられること、他の生徒と距離を空けられることなどにより、校内での学級以外の居場所になっている。

○利用ルールの整備

設置当初は、居心地の良い校内別室で、一日何もせずに過ごしてしまう生徒も多くいた。校内別室を運用する中で、明らかになった課題については、その都度改善を図り、利用ルールを整備することで、生徒が自分のペースで学習に取り組むなど時間を有効に使うことができるようになった。

○空き時間の教員による支援

校内別室支援員を週５日配置し、支援員が来られない場合は、空き時間の教員が支援するとで、生徒が毎日別室登校できる環境を整備している。

学級で過ごす日でも、その日の途中から利用できる環境は、学校生活の安心感につながっている。

○レイアウトの工夫

机の配置を工夫し、自学自習スペース、グループワークスペース、個室相談スペースを設け、生徒一人一人の状況等に合わせて利用できるようにした。

その結果、学習に向かいづらかった生徒も学習に取り組めるようになった。

## 成果

週５日、常に開室することで、利用する生徒がいつでも登校できるという安心を感じられるようにして、登校を促すことができた。また、利用する生徒一人一人に応じた対応をすることで、生活リズムを整えることや、他の生徒との関係を整理し、生徒のタイミングで教室復帰することができた。

## 課題

生徒が目的意識をもって通室できるよう、学級担任や学年の教員が関われる時間や仕組みを整備することや、校内別室における取組を更に充実させる必要がある。

# 信頼できる大人と一緒に、参加できる授業を増やす

## 不登校児童の状況

対象児童は、小学校４年生であり、小学校２年生頃から登校を渋り、母親と登校していた。４年生になると学習が難しくなったこともあり、教室に入れなくなり、校内別室に毎日、母親と登校している。下校時は、特定の友達数人と帰る。特定の人なら深い関係を築くことができる。

## 具体的な取組

○校内別室の利用

支援員や専科、特別支援教室担当教員を中心に、関係づくりを進めることができた。

個別の学習支援を行った。

○行事の参加

担任から行事（運動会の練習）やゲストティーチャー（車いすバスケ、障がい車サッカー、白杖の体験）など特別な授業について伝え、参加するか相談した。

安心できる教職員と一緒にその場所まで行き、授業に参加した。「みんながいる所は苦手」と言う時は、後方や端に座って見学することもあった。

○個別学習の時間の設定

担任と取り組む教科を相談し決定する。時間割表にどのように参加するか意思決定する欄を設け、自分の気持ちを表現できるようにした。

担任からの課題のほか、タブレットを使用した学習（スライドづくり）や当該児童が持参する課題に取り組んだ。

○給食の配膳

担任と、給食をもらったり片付けたりする時間を相談して決めた。

当該児童が「○○先生、一緒に行こう」と声をかけ、安心できる教職員と一緒に教室に行き、給食をもらい、別室で食べた。食器は教職員と一緒に、教室まで片付けに行った。

## 成果

４年生の初めは教室に全く行けなかったが、１学期の後半頃から安心できる教職員と一緒なら教室前の廊下まで行けるようになった。同じ頃から、仲の良い友達と下校したり２学期の運動会の練習や本番参加したりできるようになった。

## 課題

安心できる教職員を増やし、誰にでもサポートを求めるようにしていく。また、進度を確認しながら支援員と担任が情報を共有し、学力の定着を図るようにしていく。

# 校内別室を活用した支援について

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学当時から７月頃までは通常どおり登校していたが、人間関係をうまく築くことができないことをきっかけとして欠席が目立ち始めた。９月から校内別室を利用し始め、週３、４日別室登校することができるようになってきた。現在は、自分のペースで利用し、興味のある教科の学習に取り組むことができている。

## 具体的な取組

○来室記録の活用

校内別室に登校する生徒は、「来室記録」に登校した時間、下校する時間、取り組んだことを記入し、担任や学年教員がそれを確認できるようにしている。「来室記録」が入っているクリアファイルに教室で配付されるプリント類を入れておくことによって、担任が授業で会うことができなくとも、様々な物の受け渡しなども可能となっている。

○報告書の活用

校内別室支援員は、終了時に「報告書」に来室した生徒とその日の様子を具体的に記入することになっている。管理職・不登校担当教員が点検し、担任や学年教員にも目を通すように呼びかけている。また、利用する生徒が支援員になら話すことができる内容もあり、心の変化への気付きにつながっている。

○開室時間の拡充

校内別室の開室時間を拡充し、（９時～１５時）、来室時間に幅を設けることや、給食を食べることができるようにするなどの対応をとっている。また、教職員用の給食準備の手伝いや、学活、教室清掃のみの参加など、教室復帰への段階的な支援を行っている。

○別室利用状況の共有

校内別室の利用状況を週 1 回行う生徒指導部会で情報共有し、管理職、生徒指導主任、不登校担当教員、学年の担当教員等で、利用の際のルールについて検討している。

## 成果

利用の手続きをしている生徒が９月現在で 18 人いる。短時間の登校ができている生徒もいれば給食をまたいで利用する生徒もいるなど、幅広いニーズに対応できている。支援員との情報共有を密にし、一人一人に合った対応ができるようにしていく。

## 課題

別室のきまりを守れないなど、規範意識に課題のある生徒についての生活指導を徹底していく。

# 気持ちに寄り添った不登校対策

## 不登校児童の状況

対象児童は、小学校４年生で、２年生の後半から欠席が目立つようになり、３年生で不登校になる。通級指導教室には継続して出席し、４年生になると校内別室を利用できるようになってきた。

## 具体的な取組

○校内別室の設置

不登校及び不登校傾向のある児童の、学びの場、安心・安全な居場所を確保し、教室への復帰を目指している。

個々の児童のニーズや実態に応じた学びの場を提供する。

児童が他の児童の視線を気にせずに落ち着いて集中できる環境をつくる。

○登校と学習の計画

支援員と当該児童が相談しながら、登校のスケジュールを決めたり、学習内容の計画を立てたりする。

当該児童の意思を尊重して決定できるように支援する。

○校内での情報共有

校内別室の利用の状況を「共通理解シート」に記入して、管理職・担任・生活指導主任・特別支援コーディネーターで情報共有し、日々の支援に生かしている。

○学習内容の選択

個々の児童の意思を尊重し、当該児童の実態に応じた学習ができるように様々な学習用具を揃えている。当該児童が自分でできることを選択して取り組む。

## 成果

支援員と担任等の職員が密に情報を共有し、当該児童との信頼関係を築きながら対応することができた。

また、不登校が長く続いていた児童が継続して校内別室に登校できるようになり、学校とのつながりができた。

## 課題

校内別室につながることが難しい児童が多く、対策を講じる必要がある。

# 校内別室について

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校の頃から学業や人間関係の悩み等で欠席が多かったと引き継ぎを受けて中学校に入学した。中学校１年生の当初は、学校に登校することができず、教育支援センターを中心に通うこととなった。その後、当該生徒の状況に合わせて、校内別室への登校を進めてきた。

## 具体的な取組

○生徒自身が「自ら学ぶ」力をサポート

学習に関しては、当該生徒の学習状況に合わせて自ら教材を選ぶようにしている。タブレット端末も生徒の状況に応じて活用している。

○コミュニケーション活動の充実を図る

今までは支援員が１人であったが、校内別室指導支援員の増員が可能となり、支援員を２人体制にすることができた。当該生徒も話せる教職員が増えたことで、学習活動やコミュニケーション活動の充実を図ることができた。

○校内委員会による情報共有と方針の確立

週１回、管理職、学年担当職員、ＳＣ、支援員、サポートルーム担当者、不登校対応担当者による、校内委員会を実施している。現況の報告及び支援の方針の決定などを行い、チームでの支援体制を確立している。

○担任・支援員等による積極的な生徒・保護者への働きかけ

当該生徒が校内別室に登校した際、担任は配布物の受け渡しなどを通して面談をし、積極的に関わりをもった。また、保護者面談も定期的に行い、不登校対応担当者と支援員も必要に応じて面談に同席し、家庭との連携を深めることに努めた。

## 成果

当該生徒は、校内チームでの支援体制の下、現在では、週４日のペースで登校できるようになり、見学で、学校行事への参加もできた。今後は進路指導と卒業に向けて、当該生徒が将来に希望が見いだせるように支援を行っていく。

## 課題

校内別室の利用を希望する生徒が急増している。施設面及び、現利用者も含めての学習環境の維持が必要である。

# オンライン授業と校内別室の利用

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校２年生の生徒である。２年生になり欠席が増えた。理由は、登校していなかったので、教室に入りづらいことにある。自宅にてオンライン授業でクラスでの授業に参加を促し、学校のリズムに慣れてきたので別室登校を始めた。

## 具体的な取組

○校内別室の設置

利用する生徒が登校後、すぐに利用できるよう１階の図書室を別室として利用している。落ち着いた雰囲気の中で学習に取り組むことができ、読書をして過ごすこともできる。

○生徒の現状を共通理解

生活指導部会と特別支援委員会で生徒の現状を共通理解している。

ＳＣの勤務日には、生徒の状況に応じて、短時間でもカウンセリングや顔合わせの時間を確保し、心理的な面から支援できるよう体制を整えている。

○タブレット端末の活用

タブレット端末を活用し、配布物等のお知らせや授業で使用したワークシート、資料等を受け取っている。授業に関する情報の取得が、教室とできるだけ差がないようにすることで、教室への入りづらさの軽減を図っている。

○オンライン授業配信

学年で １ クラスを固定し授業配信を行っている。教科にもよるが校内別室からオンラインで参加することもできる。

## 成果

支援員は、現職を退かれた先生方にお願いしているので、生徒が安心して校内別室を利用できる体制ができている。そのため校内別室に継続的に登校できる生徒が多い。

## 課題

継続的な支援員の確保及び利用しやすく、登校しやすい部屋が一階には図書室しかないので別室の場所の確保が必要である。